

# 令和元年度 群馬大学教育学部附属特別支援学校研究実践報告

## 研究テーマ

### 学びを生かし、自分らしく社会とかかわる児童・生徒の育成

～学習指導要領に対応した各教科の実態把握を活用した授業づくり～

#### 1. 研究の概要

本研究は、児童生徒一人一人が学びを積み重ねながら、「育成を目指す資質・能力」を身につけ、児童生徒を取り巻く環境や社会に自らの力で主体的にかかわっていくことができるようにすることを旨とした研究である。

今年度は、本研究の初年度に当たり、児童生徒一人一人の実態を見取り、適切な学びを積み重ねるようにすることで、それぞれの児童生徒が「育成を目指す資質・能力」を確実に身に付けられるよう、新学習指導要領やその解説等を参考に、各教科の実態調査表を作成した。そして、実態調査表を用いて、観点別に児童生徒個々の実態を捉えた上で授業実践を行い、授業づくりにおける実態調査表の活用の方法や有効性について検証を行った。

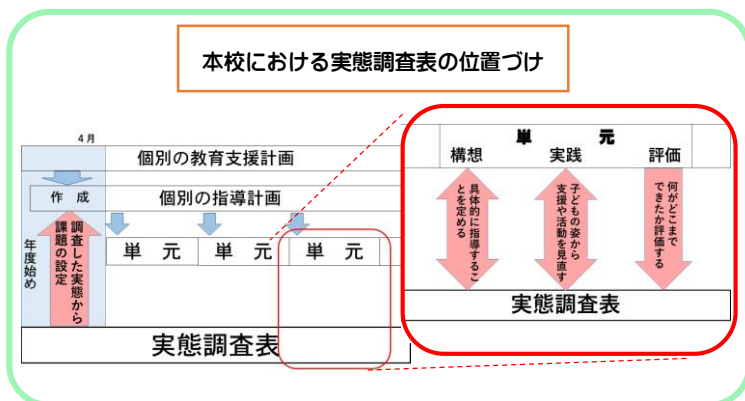
#### 2. 実践

※別ページ参照（小学部算数科，中学部保健体育科，高等部国語科）

#### 3. 本年度のまとめ

##### ○成果

- ・今年度は、国語科や算数、数学科等の一部の教科で、新学習指導要領に対応した実態調査表を作成することができた。
- ・個別の指導計画や単元計画を立案する際に、実態調査表を活用したことで、根拠をもって目標や内容の設定をすることができた。
- ・一人一人の実態を観点別に捉えたことで、児童生徒一人一人の指導の重点や具体的な支援の方法を考えることができ、単元の指導計画上に、観点別に身に付けてほしいことを想定して学習活動を設定することができるようになった。



##### ○課題

- ・設定した目標に対して、実際に見られた子どもの姿を三つの観点からどのように評価していくとよいかを整理すること。
- ・単元の学びについて「何を」「どのように」記録していくと子どもの学びの連続性を保障していくことにつながるかを明らかにすること。

##### ○今後に向けて

- ・「育成を目指す資質・能力」の三つの柱を踏まえた、授業づくりの方法や留意事項を明らかにしていきたい。
- ・実態調査表や個別の指導計画、通知表など各書類を関連させていくことで教育課程全体として、個々の学びを積み重ねることができるようにしていきたい。

## 小学部 算数科【測定（長さ）】 単元名 「くらべて みつけよう」

学習集団 小学部5年生2名, 6年生2名



### ○実態調査表から読み取ったこと

- ・本学習集団4名の児童の「測定」の領域における実態は小1段階～3段階に該当すること。
- ・知識及び技能の観点では、長さを感覚的に理解する児童や、長さを比較する際、端を合わせたりまっすぐ伸ばしたりすることに課題がある児童などがあること。
- ・思考力、判断力、表現力等の観点では、目の前の事象に対して、量（長さ）を表す言葉を使って表すことや、長さという1属性に着目してその2つの量を比較することに課題があること。

### ○実践の概要

具体物を操作しながら、長いもの、短いもの、同じものを見つけたり、長さを比べる方法を考えたりする中で、「量」（長さ）を捉える感覚を豊かにすることをねらいにした。

### ○実践のポイント

- ・授業で身に付けたことを、児童が教材の操作をとおして、試すことができるような学習活動の設定や一人一人の実態に合わせて長さに注目したり長さを比較したりできるような支援具を用意した。
- ・長さを比較する際の基礎的な知識や技能を、「ピタ」（端を合わせる）「ピン」(まっすぐ伸ばす)などと児童にとってわかりやすい言葉にして伝えた。

### ○単元の様子

- ・単元を通して授業のはじめに児童が長さに注目できるように、児童自身がへびを伸ばして長さを比べるしかけ付きの紙芝居を自作した。児童は、しかけを引っ張って「こっちが長い」と言う様子が見られた。
- ・単元の前半部分では、長さを感覚的に理解することができるように粘土や棒を使って伸ばしたり、つなげたりして長いものを作る活動を行った。また、作ったものの長さを友だちと比べる活動の中で、「端をそろえる」や「まっすぐ伸ばす」などの長さを比較する際の基礎的な知識を身につけられるように、教師は「まっすぐピン」や「はしっこピタ」を合い言葉として児童に言葉がけをするようにした。こうすることで、児童は合い言葉を手がかりに比べたいものをまっすぐ伸ばしたり、端を合わせたりして長さを比べることができるようになった。
- ・単元の中盤は、ミニカーを走らせて長い距離を走るものを見つける活動を設定した。走った距離を長さとして比べることができるように、ミニカーに紙テープを付けて走らせた。こうしたことで児童はミニカーの走った跡に残った紙テープの長さを見て、友だちと距離を比べる姿が見られた。
- ・単元の後半は、教師より長い魚を釣ることを主な活動とした。子どもの実態に合わせて、魚を比べる際に端を合わせることができるような台を用意した。活動を繰り返す中で、対象の長さに注目して比較ができるようになり、太さや形の違う魚についても、尻尾を基準線にそろえることで長さのみに注目して「これは短い」などと言いながら対象同士を比べることができるようになった。



自作のしかけ付き紙芝居



ミニカーの距離比べ



魚釣りゲーム

長さを比べる学習活動



透明シートを使って



傾斜した台を使って

実態に合わせて用意した支援具を使う

導入の紙芝居



へびが主人公の自作した紙芝居。へびを児童がまっすぐに引っ張って長さを比べるしかけがある。

粘土のへびで長さ比べ



粘土で作ったへびの長さを比べる際に端を合わせることを意識できるように基準線を机の上に示しておく。

ミニカーの走った距離調べ

友だちと台を使ってミニカーを走らせ、走った距離を比べる学習。

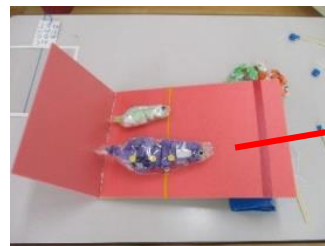


ミニカーの後ろに紙テープがついており、走った分だけテープが伸び、長さ(距離)が視覚的にわかる。

複数の友だちと比べることができるようテープをはる場所を用意した。

魚釣りゲーム(釣った魚の長さ比べ)

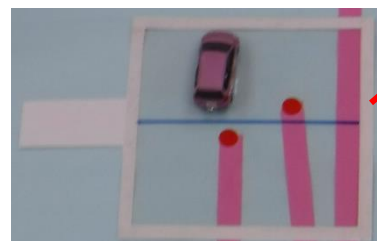
長さという一属性に着目して比べることを学ぶため、いろいろな形や長さ(大きさ)の魚を用意する。



長さを測る際、端をそろえやすくするために、壁を作ったり傾斜させたりしている。

比べる支援具 「くらべてみるめがね」

透明シートに書かれた中心の基準線を手がかりに対象物のどっちが出っ張ってるかで長い短いをとらえるためのもの。



対象物の上ののせて線を手がかりに比べる。

## 中学部 保健体育科【球技】 単元名 「ねらおう つなげよう」

学習集団 中学部1年生2名, 2年生2名, 3年生4名



### ○実態調査表から読み取ったこと

- ・本学習集団8名の生徒の「球技」の領域における実態は小2段階～中2段階に該当すること。
- ・知識及び技能の観点では、ボールを投げる、捕るなどのネット型ゲームを行う上での基本的な動きに課題のある生徒や、ねらった的に当てられるように投げ方を工夫することや、ボールを捕りやすい位置に動くことに課題がある生徒などがいること。
- ・思考力、判断力、表現力等の観点では、ボールを使って感じた楽しさを言葉や仕草、表情などで教師や友だちに伝えることが学習集団全員に共通している課題であること。また、簡略化されたゲームの中で相手の守りの弱いところを見つけることが課題の生徒なども多くいること。

### ○実践の概要

ネット型ゲームをとおして、仲間と協力して得点する喜びや楽しさを感じながら、ねらって投げる、落下地点に動くなどの力を高めることをねらいにした。

### ○実践のポイント

- ・生徒の投げることや捕ることに関する課題について実態把握をし、授業の前半のボールを使ったサーキット運動（以下ボールサーキット）の中で個々に合わせた活動を取り入れた。
- ・ゲームを行う際には、作戦ボードで自分たちの動きを確認する活動を取り入れた。

### ○単元の様子…Aさん, Bさんを中心に

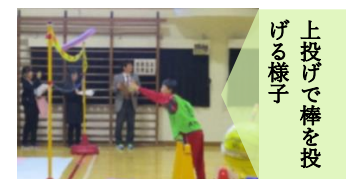
- ・主な学習活動の流れ…体操→本時の目標決め→パス練習→ボールサーキット→ゲーム→振り返り
- ・Aさんについて（知識及び技能, 思考力, 判断力, 表現力等ともに中2段階）

Aさんは「チームや相手の動きを想定して作戦を立て、作戦に合わせてシュートやパスをすることができる」ことを単元の目標に設定した。単元の前半は、ボールを投げたり捕ったりすることを熱心に行っていたが、点を取るために相手のいない場所をねらって投げる姿は見られなかった。そこで、ウォーミングアップのパス練習では、相手との距離を近くしたり遠くしたりして力を調節して投げる活動を取り入れた。また、ゲームの際には、作戦を立てる活動や、どこをねらうと良いかが分かるように、ボールの落ちた場所を判定する審判の活動を取り入れた。こうしたことで、単元の後半では、「相手がいらないところをねらう」と言っ、作戦どおりにコートの中を空いている場所をねらって得点をあげることや、味方や相手の位置をよく見てパスやシュートをすることができるようになった。さらに、得点しやすい場所に動くよう積極的に友だちに「〇〇さん前に行ってください」など指示を出す姿も見られるようになった。



- ・Bさんについて（知識及び技能, 思考力, 判断力, 表現力等ともに小2段階）

Bさんは「得点するために、ネットやコートを見て、上手投げで相手コートにボールを返すことができる」ことを単元の目標に設定した。まずBさんが、ゲームの相手コートにボールが落ちたら得点というルールが理解できるように、「点が入ったときはみんなで喜ぶ」というルールを追加した。また、ボールはビニール袋に緩衝材を入れて作成し、掴んで投げやすくした。さらに、ボールサーキットでは身長より高いネットを超えるように長い棒を投げる活動や的をめがけて投げる活動などを取り入れた。こうすることで、ネットの上方をよく見てからネットを越えるようにボールを投げるができるようになり、ゲームの際には、自分からボールを相手コートに投げ入る姿や、得点すると友だちとタッチをして喜ぶ姿が見られた。



単元名 「ねらおう つなげよう」で用いた主な教材・教具

生徒自身で考えるために

教師が設定した目標と生徒の頑張りたいことが離れないようにするために用意したカード。生徒はこの項目から一つその日頑張ることを選ぶ。



作戦ボードを使って自分で相手の位置を確かめたり、ねらう場所を考えたりすることができるようにした。

一人一人の目標に合わせて学習するために



ビニール袋に緩衝材を入れたことでボールよりもつかみやすくなっている。



生徒の実態や目標を踏まえてチーム編成することで、ゲームをとおして良い姿が見られた。

実態を踏まえた様々なボールサーキット



高い所にボールを投げて転がってくるボールをキャッチする。投げた本人からは落ちてくるまでボールは見えないため、落ちてくるボールに合わせて素早く位置を調整することをねらった。



的に当たったことが分かったり、的に当てるよさを感じられたりするように当たると音が鳴ったり、光ったりする星型の的を用意した。



高いところと低いところのあるネットを用意し、ネットを越えるように棒を投げる運動。上投げでまっすぐに投げようとする姿が見られた。

## 高等部 国語科【聞くこと・話すこと】 単元名 「思いや考えを伝えよう」

### 学習集団 高等部1年生6名



#### ○実態調査表から読み取ったこと

- ・本学習集団6名の生徒の「聞くこと・話すこと」の領域における実態は小3段階～高1段階をそれぞれ参考にするとよいこと。
- ・知識及び技能の観点では、言葉に関する知識として、言葉を3語文以上にして話す際に、正しい語順や助詞を用いることを課題とする生徒が多く見られたこと。
- ・思考力、判断力、表現力等の観点では、相手に伝わるような言葉を選んだり、情報を絞ったりすることに課題が見られたこと。また、友だちや教師の質問に対して、話題とは異なる回答をする姿があること。

#### ○実践の概要

プレゼンテーションの作成と発表をとおして、思いや考えが相手に正しく伝わるように内容や構成を工夫したり、質問に適切に応答したりする力を高めることをねらいにした。

#### ○実践のポイント

- ・本学習集団の日常の姿から、興味や関心がある事柄については、饒舌になったり、単語としてはっきりと伝えたりする姿が多いという実態把握の視点と、卒業後の自己表現や意思伝達という高等部段階として身に付けてほしいことの二つの点から、プレゼンテーションのテーマを「好きなこと」や「自分のこと」とした。
- ・実態把握の結果から、相手に伝える情報を整理する「内容の検討」や相手に伝わるように正しい言葉に表す「表現」に重きを置き、個々の実態に応じたワークシートを用意した。また、学習したことを自分で振り返ることができるよう作成したワークシートを「プレゼンファイル」として綴じ込むことができるようにした。

#### ○単元の様子

単元の前半は、個々に伝えたい事柄について考えた。はじめに、イメージマップを用いて伝えたい事柄を思い浮かべるようにした。次に国語の実態調査を踏まえ、個々の言語能力や目標に合わせたワークシートを用意し伝えたいことをより明確にできるようにした。こうしたことで、それぞれが伝えたい事柄を決め、思い思いの言葉でワークシートに書き出すことができた。また、ワークシートだけでなく個別の支援として、とくに相手に伝えたい言葉に印を付ける、質問や返答などのやり取りをする、写真を選ぶなどを繰り返すことで、発表に向けて伝えたいことを絞ることができた。学習集団の実態を踏まえて、テーマを「自分の好きなこと」としたことにより、6名の生徒は自分から調べたり、調べたことを教師に伝えたりして授業に意欲的に取り組む姿が多く見られた。



単元の中盤は、ワークシートをまとめた「プレゼンファイル」を手がかりにタブレット端末でプレゼンテーションを作成し発表を行った。ここでは教師が手本を示すことで、プレゼンテーションの作り方を確かめたり、友だちと互いの発表を見合ったりした。こうする中で、スライド作成に慣れてくると、「プレゼンファイル」を振り返り、伝えたい事柄に関連した写真や、印を付けた言葉を選びスライドに取り入れたり、端的に伝えたい事柄が伝わるように説明したりする様子が見られた。

単元の後半には、読み上げの原稿がなくてもスライドに沿って自らの言葉やジェスチャーを用いて相手を見ながら発表する様子が見られた。また、相手に発表をとおして伝えたいことが伝わるよさに気付くと相手からの質問にも丁寧に答えて詳しく説明しようとする姿が見られた。



プレゼンテーションの作成や発表の様子

テーマについて教師と本人が話を  
する中で、大切な  
キーワードを付箋に  
書き、ワークシートに  
貼り付けた。



手軽にプレゼンテーションの  
変更、修正ができるように  
タブレットを使った  
プレゼンテーション  
作成を行った。今回は  
生徒の実態等を踏まえて  
『Keynote\*』を採用した。



※KeynoteはApple Inc.の商標です

聞いている友だちにも、  
伝わりやすいように  
テレビに画像や言葉を  
映して発表を行う。

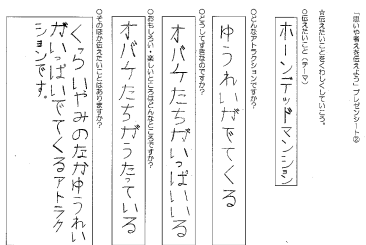


「イメージマップ」

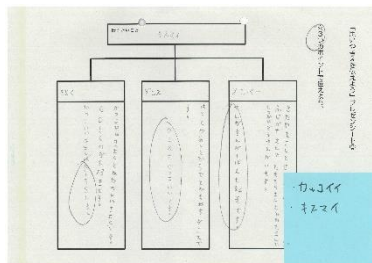


自分が決めたテーマを  
中心に書き、書いた  
テーマに関するものを  
考えて周りの枠に  
書いていくことで、  
テーマについて、  
多角的に捉えることが  
でき、説明の際の  
手がかりにした。

実態に合わせたワークシート



ワークシートに書かれた  
質問に答える形式で  
考えを膨らませるため  
のワークシート。



考えた文について、  
教師とやりとりし  
ながら、自分で大切  
だと思う部分を丸で  
囲むことで整理した。



関連した画像を見  
ながら伝えたいこと  
を考えられるよう  
にするためのワー  
クシート。